

## 現場教育の機能強化と大学教育との連携

横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校副校長  
甘利 修

### 1 はじめに

毎年多くの学生を教育実習生として受け入れている附属学校が教育実習の質的向上を目指すのは当然のことであるが、大学との連携のもとで教員養成に対する附属学校の役割をさらに向上させていきたいと考えている。

現在の公立学校は、学習指導から保護者対応まで多様な課題を抱えており、現職教育や研修制度が充実しているとはいえ、基礎的な力が不十分な学生が教職に就いても簡単に対応できる職場ではなくなっている。

教員養成課程に入学する学生は、18歳の段階で教員養成の道を選択してはいるが、現代的な学校における教師の役割や責任を十分に理解して選択しているとは言い難い。「教師になる覚悟」が不十分なまま課程に在籍し、4年間の学部教育を修了していく学生が多いように思うのである。

こうしたことから教育現場での課題や教師の責務に理解を深め、現場での実習を重ねて確かな教師像を構築させていくことが大切であり、なんとなく経験的に抱えている学校観や教師像を、実証的客観的にとらえ直して、再構築していかれるような教育課程が必要である。

その視点に立って、教育現場が学生教育にどう貢献できるかを考えていきたいと思っている。

本年度、附属学校として直接学生に関わる教育実習の改善に向けてアンケート調査を行った。その結果について学生の意識や教育実習が学生に与える影響などの点から報告する。

### 2 教育実習の概要

①実施年次 3年次

②実施時期 6月1週間・9月3週間（合計20日）

③受け入れ人数 69名（各クラス4名）

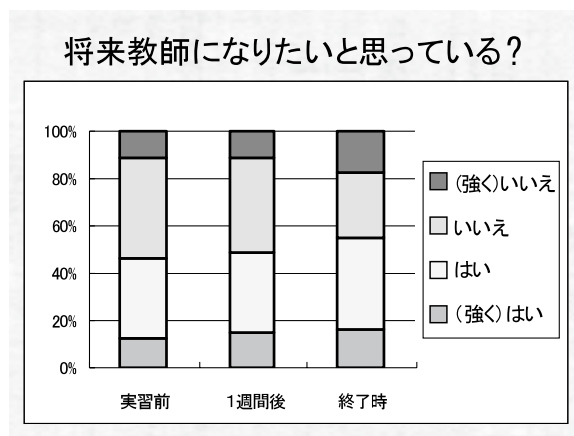
④アンケート調査

6月実習前、6月実習後、9月実習後の3回実施  
回答数62

⑤その他

実習にあたっては、実習当初から実習生全員がT.Tで指導に参加すること、教員志望でない学生についてもそのまま受け止めること、学生本来の指導性を発揮させていくように留意すること、を方針とした。

### 3 アンケートの結果から

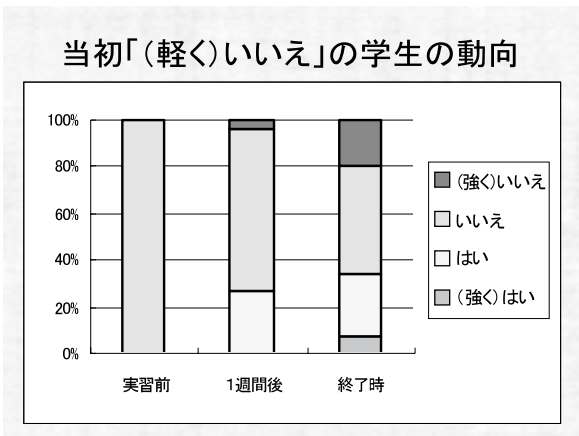


教員志望は約半数

#### ①教員志望の有無

教育実習の学生が教員志望であるかどうかの質問である。上のグラフのように、教員志望者は実習前には半数を切っているが、実習後は55%程度まで増加している。一方で強い否定も増加している。

この回答の中で実習前に軽く「いいえ」の回答をしている学生の実習後の回答が興味深いものがあった。

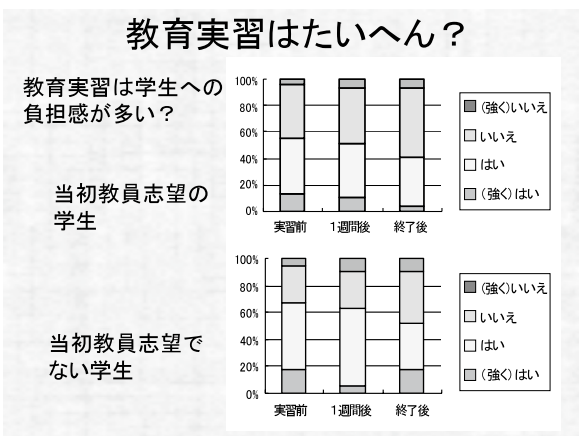


実習で教職志望が増加

上のグラフのように、実習前は教職志望について否定的であったが、実習を経ることで、3割以上の学生が教職への気持ちを抱き始めている。しかしながら2割の学生は、改めて否定の念を強くしている。イメージで理解してきた学校像・教師像を、実習で指導者という立場から子どもに関わることで具体的にとらえ直しているものと考えられる。

### ②教育実習の負担感

1年間の教育実習をという議論もあるが、学校現場での教育実習は、学校教育課程の学生にとって必修である。この教育実習に対して学生は負担と感じているのであろうか。



たいへん感はやや減少

上のグラフのように、実習前は半数以上が負担感を感じており、特に教員志望ではない学生にはその比率

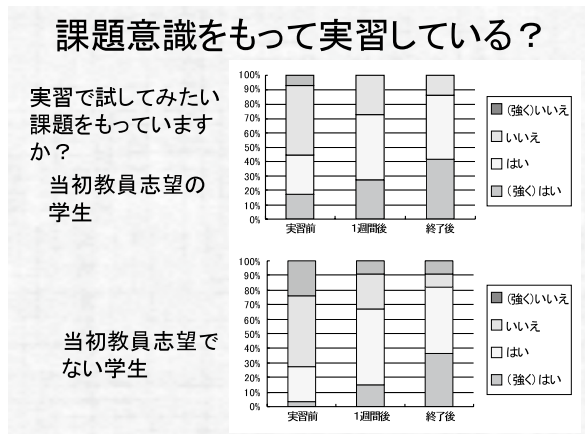
がたいへん高い。

学校教育課程に在籍しながら、「教員志望ではない、実習もたいへんそう」という学生は、勉学への目的が見えにくい4年間を過ごすのではないかと心配になる。しかし、教育実習をとおして多少ではあるが、改善しているようすがわかる。

大学の教育活動をとおして、教職への理解を深めていくことは、学生全体の勉学の質を確保していくためにも大切である。

### ③教育実習への課題意識

学校現場での教育実習に大学での講義とは違う期待感や課題意識をもって、取り組もうとしているのだろうか。



子供を前にしてやるべきことが明確化

調査をしてみると実習前にはあまり期待感や課題意識をもってはいないことがわかる。大学の学習の延長として実習に臨んでいる様子を読みとれる。しかし、実習後になると「課題に取り組めた」という比率が非常に高くなっている。子どもを前に指導者として臨む教育実習が学生にとって刺激的であり、自分の中に潜在していたであろう課題を顕在化させている効果がみとれるのである。

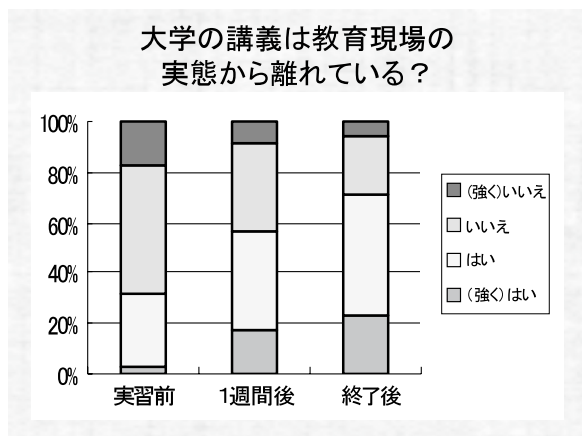
この質問は、今回のアンケートの中で実習前と実習後における変化がもっとも顕著だった。

### ④大学の講義と教育現場の距離感

大学の講義と教育現場との距離感を学生は感じているのだろうか。

この調査も実習前後でたいへん大きな違いがでた質

間だった。実習前は、たいへん楽観的であったが、実習が進むにつれて距離感を感じる学生が多くなった。

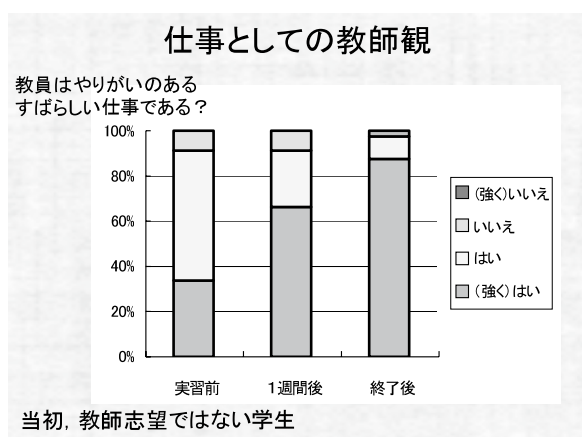


#### 学校の現場は重要だとの認識

実習で指導者として子どもたちに接するとき自分たちの力不足を感じるとともに、大学での学習やいわゆる「座学」の限界を認識しているようである。これは大学で学ぶことについて新たな視野が開かれているともとらえられる。講義に含まれている内容をより深く理解したり、広く考えることができるようになったりするのはないだろうか。大学での学習意欲が増していくように作用すると考えられる。

#### ⑤仕事としての教師観

仕事としての教師はどう感じているのであろうか。実習前に教師の志望ではない学生の回答をグラフとして掲載した。



当初、教師志望ではない学生

牧師の仕事に改めて肯定的な気持ちができる

仕事として強い肯定が、実習が進むとともに大きく増えていく。実習をとおして、教師を具体的に体験することで、改めてその重要性を認識していると考えられる。教職課程を選択した学生にとって教職は決して遠い存在ではないだろう。学生が実習で直に感じ取ったことが教職観を改めてつくり、それが学びの必要感をより明確にしているようすが伺えるのである。

#### 4 指導する立場での実習と教育

こうしたアンケート調査で、学生にとって学校現場での経験が学生自身に多様な刺激となっていることが改めて確認できた。

教育現場の参観や体験が大学初年度から行われているが、参観する立場と指導する立場では受け取る内容が大きく異なる。大学と現場が役割分担をすることは、それぞれの機能を発揮することに他ならない。今回のアンケートでも子どもを指導する立場を基本とした学びや実習がより大きなインパクトを与えることがわかった。今回の調査をもとに学生の実態もふまえて一層のプログラムの改善を図っていきたい。